

レポート
正高信男先生の記念講演

「人はなぜ子育てに悩むのか」を聴いて

井上知香

日差しが照りつける気持ちのいい五月、吸い込まれるような青空の下、第六十一回日本保育学会が名古屋にて開催されました。今大会の始まりを告げる記念講演は「人はなぜ子育てに悩むのか」と題して正高信男先生（京都大学霊長類研究所・教授）によるものでした。

この講演は名古屋市公会堂という場所で行われたのですが、この公会堂は大正や昭和初期の時代を思わせるモダンな風格を備えた外観（印象的な窓の形や、天井の高い入り口、こげ茶色のタイル張りなど）を有しており、とても素敵な雰囲気を見せて

いました。また公会堂は鶴舞公園の中に位置付いています。大きくなり始めた木々の葉やバラなどの花々が、名古屋へと降り立った私を自然と迎え入れてくれました。

名古屋市公会堂は、昭和天皇の結婚記念として、一九三〇年に開館し、第二次大戦中には軍の司令部として使用され、戦後はGHQに接収され連合軍兵士専用劇場として用いられていたとのこと。このように日本の歩んできた道を静かにじつとみつめてきた建物において、現代の日本社会が抱える問題を鋭い視点から見つめる正高先生の話を伺えたこと

がとても印象的でした。

講演は、会場へ駆けつけた多くの人々の笑いを誘いながら、霊長類研究所と先生とのかかわりの歴史といった話から始まりました。

その後、スライド画面を使った数量の認識実験を会場の方々と行つての認識に関する人間の脳の話、今教育現場で重要なトピックとしてあげられる発達障害というものは文化によつて規定されるものだという話がありました。また、人の自己形成は周囲の人々とのやりとりによつてなされる、つまり他者がいてはじめて自己が成り立つのだという話や、人間関係の希薄化に伴つた現代社会における子どももの育てにくさを踏まえての地域社会における子育てについての話、といった盛りだくさんの内容で講演は進んでいきました。

とてもリズムカルに、次々と話題が展開されていく先生の講演でしたが、そこに一貫して流れていたものは、「人は誰かとながつて生きているのだ」、

少し強く言うならば、「誰かと出会い、つながらなければ生きていけない」というものだったのでないかと思えます。以下に少し具体的な先生の話の内容を三点ほど紹介していききたいと思います。

初めの認識に関する人の脳についての話は、人数を言語で認識するのではないという内容のものでした。

人は、言語を介在することなく、数量を正しく的確に認識することができる。これは、数量を認識する部分と言語をコントロールする部分が脳の中で異なるためである。進化的な歴史を見ても数を認識するほうが先にくる。

のだそうです。これは、進化的にみて、そもそも人間とは理屈ではないところで生きているということ

を表しており、つまり身体で体感することが人の基本をなしているということを意味しています。

発達障害については、

発達障害は今小中学生の六%を占める。障害というものはこれまで二万人に一人か一万人に一人といった割合が常識だったことを考えれば、この発達障害を示す数値は非常に多いといえる。この発達障害というものは、かつての社会では顕在化しなかった。現代社会において職種の多様性が実質上なくなってきたことも発達障害を顕在化させる一つの要因となっている。つまり今は、こういった人々を吸収する場がなくなってきているといえる。これは社会において、発達障害の問題が深刻にとらえられるベースが存在していることを意味している。現在障害とは認知されていない方向音痴というの、実は立派な障害になる。とい

うのもアマゾンに行けば確実に死につながるからだ。つまり、障害が何によるかといえは、文化によるものなのだ。今の時代は非常に発達障害をもつということが生きづらさにつながっている。こういう見方というものが、結果として子育てをする親を悩ませることとなる。

といった内容でした。名称が一人歩きし、異質なものとして発達障害を位置付けかねない危険性をもつ現代において、この発達障害に関する話は、一つの新しい知を提示してくれるものでした。

自己形成に言及した内容は、人は周囲とのやりとり、周囲が自分をどう見ているかといったフィードバックにより自己がつくられる、というものでした。

痛みというものは、他人とのやりとりを介してでしか知ることができない。というの、痛みは



身体的痛みとともに心理的痛みをもってその痛みを増幅させる機能をもっている。

からなのだそうです。しかし現代においては、やりとりを行う環境が希薄化しているため、自分が働きかけたときに他人から返ってくる壁というものがなくなってきたている（つまり反応がもらえない）ことを問題点として指摘していました。

以上の講演内容を聴きながら、私がこれまで観察してきた保育実践の様子が自然と浮かんできました。それは、子どもの身体の動きにおのずと保育者の身体も動いていってしまおうといった、身

体性に見られる保育者と子どもとのやりとりや、すぐには理解できない子どもへの姿にも、そこへすぐ大人の言葉を挟んで規定することなく、まず共に在ろうとする保育者の子どもへの姿勢といったものです。このような子どもに対して応答的な保育者の存在が意味するものは何か……。今後の研究を進めるにあたり、非常に大きな示唆を与えていただいたように感じます。

講演後、なにかストーンと落ちてこないしこりのようなものが残っている感覚を覚えました。それは、理屈ではないところ、まさに身体での体感をもって人は生きているのだと話された正高先生に「君ならどう動く？」と問われているような、するどい眼差しを身に受けるのをどこかで感じていたからではないかと思います。

（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
人間発達科学専攻 保育・児童学領域 博士後期課程）